明治31年網走から上川沿（豊川）までの道のり
『イワケシュ郷土史』からの抜粋・編集

＊馬渕マサヨ談

（略）父、玄十郎は明治29年に家族を郷里に残して単身入地、開拓に従事したが、私は31年に母親や兄姉と共に渡道した。（注：当時、マサヨは7才）家族は幾日かの船旅を重ねて網走に着いた。幼いマサヨは振り分け荷物と一緒に背負われ、家族一同は網走から徒歩で常呂の目的地へ向かった。

母や姉たちはかねて用意してきた藁ぞうりや草鞋を足にして網走を出発した。網走の市街を出て歩きにくい坂道にさしかかったが、ここは俗に分監坂といわれる難所の1つである。行けども行けども道は林の中であり、湖のほとりを歩き続けて、やがて能取坂を越えてやっと常呂浜に搗いた時は既に太陽は西に没し、1日がかりの行程であった。

苦労してやっとたどり着いた我が家は家とは名ばかりの掘っ立て草ぶきの粗末な小屋であったので、驚きのあまり母は悲しみに泣きくれてたのが今なお記憶に残っている。

それからは親、兄姉の苦闘の開墾作業の毎日である。私は冬になると、父が作ってくれ得たわら靴をはき、小学1年生として学校に通った。（略）